

墓の役割

先日の秋のお彼岸に、家の墓を自分で壊して撤去している男性の姿がTVに紹介されていました。今13才の独り娘に将来負担をかけたくないからだそうです。誰もお世話をしない**無縁墓地**が増えて来ています。家の墓を守り続けることがその家で生まれ育った者の**大事な務め**でしたが、居住地から遠く離れた墓を守ることが、次第に難しくなってきたのです。

墓の役割は死者の霊を慰めるためだと墓屋さんが言っていました。**死者の霊**は、初めは不安定で家の周りをさまよい、時には災いをもたらします。それが初七日に始まって49日、100日、一周忌と供養を営むことで死霊も安らぎ、家の繁栄をもたらす霊になってくれます。そして法要を30年受けると血縁を離れて地域全体の繁栄に貢献する霊に仲間入りするので、地域全体でお祭りをして供養する、これが日本人の**考え方**なのだそうです。

迷惑をかけたくない

戦後のベビーブーム時代に生まれた世代が65才前後になりました。今後の高齢化によって2030年には1年間に亡くなる人が今より30%増えて約170万人で、出生者は70万人。日本は100万都市が毎年1つ消失していく**多死社会**になると報道されました。

こうしたなか、自分の最期を迎えた後のことについて意識が大きく変わろうとしています。その一つが**献体**を決めた人が増えていることです。半数は「医学の発展のため」ですが「**家族に迷惑をかけないため**」と言う人が増えてきました。葬儀には平均して合計約**200万円**(日本消費者協会調べ)はかかるけれども、献体すると**大学側**が家族に代わって火葬から弔いの式まで行ってくれます。

50代の女性が、自分の**母親の死**をきっかけに献体を決心しました。葬式や納骨などの慌ただしさで悲しみにひたる間もなく、**重い気持**だけが残った経験から、自分が死んだ時には「同じような思いを夫や子どもたちに抱かせたくない」と強く思ったからだそうです。

自分が亡くなった後は家族に葬儀をしてもらって、**お墓に眠る**というこれまで当たり前だったことが、変わり始めました。世間並に供養しないと恥ずかしいからなのか、それとも手厚く供養しないと死者の霊が浮かばれないと恐れてなのか、とにかく葬儀とその後

の供養の負担が大きくなることで、家族に迷惑をかけたくないという思いが、次第に強くなって来ているのですね。

信仰の父の証

旧約聖書にはイスラエル民族の始祖となったアブラハムの信仰が語られています。彼は文明の発祥地メソポタミアの出身ですが、神の声を聞いて、行き先もよく知らないままに出立しました。そして辺鄙なカナン地方に来ると、この地をお前の子孫に与えると神の声を聞きました。目的地に到着したのです。ところが彼はそこに家を建てないで天幕生活を続け寄留者の生涯を通しました。息子イサクも孫のヤコブも、アブラハムにならって、家を建てませんでした。

私たちの多くは、ここが自分の定住の地だと決めたら、自分の家を建てるか購入します。どうしてアブラハムたちはそうしなかったのでしょうか。新約聖書の信仰者は、その理由をこう解説しています。「神が設計者であり建設者である堅固な土台を持つ都を待望していたから」。「更にまさった故郷、すなわち天の故郷を熱望していたからである」。

彼らにとっては、地上の生涯が全てではなかったのです。神のお傍で共に暮らせる天の故郷、はるかに良い神の都での生涯を待望しつつ、地上の生涯を送っていたのです。そして彼らは地上の生涯を閉じて眠りにつき、墓に葬られました。

孫のヤコブも死期が近づいた時、息子に言いました。「わたしが先祖たちと共に眠りについたなら、わたしを先祖の墓に葬ってくれ」。彼も祖父や父同様に家を建てず、地上の生涯を送りました。そして同じ信仰を抱いて眠りについた先祖たちのもとに行って、共に眠りにつき、天に迎えられる日を待つと語っています。信仰者にとっては、墓とは天の故郷に迎えられる朝を待ち望みつつ、先祖たちと共に眠りについている寝所なのです。

明るい呼びかけ

このような生涯の閉じ方には、嘆きや悲しみ、負担の重さや煩いといった葬儀の負の思いはありません。さあ、貴方たちも与えられた地上の生涯をしっかりと生き抜いて、私たちと眠りを共にしよう。天の故郷を目指して、平安な眠りを共にしようという明るい信仰の呼びかけが響いてくる葬儀になるでしょう。そのような希望を遺すことこそ、先に眠りにつく者の思いやりではないでしょうか。

「彼らは更にまさった故郷、天の故郷を熱望していたのです」 聖書